

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の2年目)

1. 研究課題

モノ・知識・環境

Things, Knowledge, Environment

2. 研究代表者氏名

瀬戸口 明久

SETOGUCHI, Akihisa

3. 研究期間

2023年4月-2026年3月(2年目)

4. 研究目的

本研究では、知識をつくるモノについて考えてみたい。知識とは、人間の脳のなかでのみ生じてくるものではない。人間は手をつかって対象に触れ、操作し、加工することで知識を生み出してきた。現代社会における知識は、きわめて複雑な機械によって生み出されている。自然についての知識は、実験装置や実験生物、標本などによって日々、生産されつづけている。社会についての知識は、紙やコンピュータにデータとして書き込まれることで膨大に蓄積してきた。これらのモノと知識のネットワークは、私たちが生きる世界の秩序と構造をつくるテクノロジーとして作動している。つまり現代においてモノは、人間をつつみこむ環境になっているのである。そこでモノは、どのようにして、いかなる環境を生み出しているのだろうか。そして増殖するモノのなかで、人間はどのような存在になっているのだろうか。本研究では、人文学の多様なアプローチをもとに、自然科学、工学、社会科学の知識について検討し、人文学そのものについても自己言及的に考察を深めたい。

This project will focus on things that generate knowledge. Usually, we assume knowledge to be intellectual information processed inside our brains. However, knowledge is always mediated by things. Humankind has created knowledge by using their hands to manipulate natural products. In modern society, knowledge is produced through complex machines. In the natural sciences, things such as instruments, model organisms, and specimens are used as the media to produce knowledge. Knowledge of society is also accumulated as information on paper and in computers. The network of things and knowledge constructs the order and structure of our living world. It means that the network of things is now the environment of humankind. This project tries to clarify what kind of environment things are creating and how such an environment has changed our lives. Based on various approaches from the humanities,

we focus on the natural sciences, engineering, and social sciences and also deepen consideration of knowledge production in the humanities using a self-referential approach.

5. 本年度の研究実施状況

令和6年度には、9回の例会（うち1回は特別例会）と2回の国際ワークショップを開催した。その主題は、大きく以下の3つに分類される。①東アジア科学史の歴史叙述に関する検討、②東アジアの科学思想に関する検討、③観測装置、医療施設、事務機械など、モノを通して知識生産や秩序形成の実践に関する歴史学的・社会学的検討である。そこから見えてきた問いは、次の3点である。①東アジアの科学史を、西洋科学の伝播としてではなく、グローバルな物流や出版文化の中に位置づけること、②工業化とともに社会の産業化の中で、独自の思想を展開した東アジアの論者の議論を明らかにすること、③本研究班の課題としては、気象、動物、植物、病原菌、人間の経済活動まで広範囲におよぶこと、である。また、報告には、科学史や科学社会学に加え、動物生態学やメディア論など、知識生産の現場に近い視点からの研究も含まれた。これらの研究会を通じて、モノが生み出す知識や環境について、多角的な検討を行うことができた。

6. 本年度の研究実施内容

2024.4.26 All the Sciences Under One Roof: Shimomura Toratarō's War on "Japanese Science"
発表者 岡澤康浩

2024.5.17 カミオカンデ以前：小柴昌俊と「非加速器実験」の起源 発表者 有賀暢迪 一橋大学大学院言語社会研究科

2024.6.14 Recycling Pages between Batavia and Edo（「東アジア伝統科学における自然と人間」研究班と共催） 発表者 ショーン・ハンスン ダーラム大学 コメンテーター 濱戸口明久 コメンテーター 平岡隆二

2024.7.15 'Science Wars' in East Asia Workshop All the Sciences Under One Roof: Shimomura Toratarō's War on 'Japanese Science' 発表者 Yasuhiro Okazawa
Science is the War of the Intellect': Nishi Amane's Sociology of Knowledge in Early Meiji Japan 発表者 Hansun Hsiung Durham University Civilization vs. Essence-Function (Tiyong): Tianyan lun (On Heavenly Evolution) and the Post-1895 Debate on the Primacy of Science versus Technology 発表者 Sean Hsiang-lin Lei Academia Sinica Which Science? Interpreting Choe Han-Gi in the Two Koreas from the 1960s to the Early 1990s 発表者 Jaehwan Hyun Pusan National University Epistemology of the Spectral: Spirit Photography and the Chinese Enlightenment 発表者 Menglan Chen Harvard University

2024.7.26 結核をめぐる医療実践の歴史——科学と非科学の境界をめぐって 発表者 西川純司 神戸松蔭女子学院大学文学部

2024.10.25 動物研究の知の産出装置としての観察者の身体とその変容 発表者 西江仁徳
アジア・アフリカ地域研究研究科

2024.11.9 International Workshop, Things, Organism, and Environment: East Asian Biological Technologies Making unruly ocean smart: smart aquaculture projects in South Korea 発表者 Seulgi Lee KAIST The Birth of ""Weeds""? An Attempt at a History of Beings and a Concept 発表者 Soto Tsuruta Osaka University Defining ""Clean Seas"" between the United States and Japan: The Transpacific Politics of Shellfish Sanitation in Post-1945 Hiroshima Bay 発表者 Kjell Ericson 文学研究科 Sweeping Net: History of Body Practices in Insect Collecting 発表者 Akihisa Setoguchi Resourceful Creativity, or 機智: socioecological evolution of papermaking with tak in late Chosön 発表者 Jung Lee Ewha Womans University

2024.12.16 『暮らしの手帖』における商品テストの確立と発展（「高度経済成長期の生活史」研究班と共に） 発表者 西川晃弘 大阪大学大学院人文学研究科科学技術社会論専門分野博士後期課程

2025.2.17 Monopolizing Knowledge: The East India Company and Britain's Second Scientific Revolution（文学研究科科学哲学科学史専修と共に） 発表者 Jessica Ratcliff Cornell University

2025.3.7 レーダー観測と気象情報のメディア史（モノ-メディア研究と共に） 発表者 水出幸輝 同志社大学社会学部メディア学科

2025.3.28 事務の歴史社会学・序説——『事務と経営』の創刊からの20年間を資料として 発表者 新倉貴仁 成城大学

7. 共同研究会に関連した公表実績

『人文学報』122号小特集「〈小特集〉 可能性の空間の地図制作—— 概念の歴史学と実践の社会学の対話 ——」に、本研究班から岡澤、河村が寄稿した。

8. 研究班員

所内

瀬戸口明久、伊藤順二、KNAUDT, Till、小堀聰、平岡隆二、藤原辰史、岡澤康浩
学内

ERICSON,Kjell(学際融合教育研究推進センター)

学外

標葉隆馬(大阪大学社会技術共創研究センター)、中尾麻伊香(広島大学大学院人間社会科学研究科)、森下翔(山梨県立大学地域人材養成センター)、河村賢(大阪経済大学国際共創学部)、都留俊太郎(中央研究院台湾史研究所)、藤本大士(ハイデルベルク大学トランスカルチャール・スタディーズ・センター)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	10		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	2		1	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	3		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適當ではない分野等

	雑誌名	掲載論文数	掲載年月	論文名	発表者名
1	人文学報	1	2024.6	レールに身体を横たえて—— 鉄道自殺の技術論	瀬戸口明久
2	人文学報	1	2024.6	青空がほしい再訪：高度成長 期戸畠の婦人会による反公害 運動の道のり	小堀聰
3	人文学報	1	2024.6	可能性の空間の地図制作：概念の歴史学と実践の社会学の対話	岡澤康浩
4	人文学報	1	2024.6	普段着姿の認識論と存在論に立ち戻る	河村賢
5	『山田慶兒著作集 第七卷—科学論（近代篇）・欧文』臨川書店	1	2024.7	解題	平岡隆二

6	鈴木淳・山口輝臣・沼尻晃伸編『日本史の現在 6 近現代 2』	1	2024.7	公害と環境史	小堀聰
7	石川禎浩編『20世紀中国史の資料的復元』京都大学人文科学研究所	1	2024.7	ラテン化新文字運動の始動—倪海曙の編年史叙述の検討とエスペラント要因—	都留俊太郎
8	大阪社会運動協会編『大阪社会労働運動史 第10巻』	1	2024.7	電力・ガス・水道	小堀聰
9	Tehamo	1	2024.8	ジェンダー史から医療を考える(2) 北海道開拓と女性医療従事者たち	藤本大士
10	Japan: The Archipelago in Pacific and Global History, ed. by Stefan Huebner, Nadin Heé, Ian J. Miller, and William M. Tsutsui (University of Hawai'i Press, 2024).	1	2024.11	Becoming Kai-Lingual: Shellfish Sensors, Oceanic Traces, and the Interpretation of Submerged Histories in Ago Bay	Kjell Ericson
11	企業家研究	1	2025.2	書評 中瀬哲史著『日本の電力システムの歴史的分析—脱原発・脱炭素社会を見据えて—』	小堀聰
12	藤原辰史・香西豊子編『疫病と人文学——あらがい、書きとめ、待ちうける』岩波書店	1	2025.2	「軍事空間」としてのパンデミック——COVID-19 とマラリア	瀬戸口明久
13	藤原辰史・香西豊子編『疫病と人文学——あらがい、書きとめ、待ちうける』岩波書店	1	2025.2	日本資本主義のなかの流行性感冒	小堀聰
14	藤原辰史・香西豊子編『疫病と人文学——あらがい、書きとめ、待ちうける』岩波書店	1	2025.2	感染症予防啓発のメディア史——戦前日本の衛生映画に注目して	藤本大士

15	マルタン・ノゲラ・ラモス、平岡隆二編『関西の隠れキリスト教発見—茨木山間部の信仰と遺物を追って』人文書院	1	2025.3	茨木へのキリスト教伝来—その由来と展開	平岡隆二
----	--	---	--------	---------------------	------

本年度発表された高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された論文

	雑誌名	インパクトファクター（数値）	掲載論文数	掲載年月	論文名	発表者名
1	Environmental History	0.6	1	2025.1	Seed Oyster Inspection, Matsushima Bay (circa 1958)	Kjell Ericson

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書
なし

12. 博士学位を取得した学生の数
なし

13. 次年度の研究実施計画

令和 7 年度は引き続き、班員の研究報告に加え、本研究課題と関連する研究を行っている研究者に報告してもらう。これまで 2 年間の研究班活動を通じて、機械や生き物などのモノに注目する問題意識が広く共有されていることが把握された。令和 7 年度は、歴史学だけでなく、メディア論、人類学、社会学などでモノに関心をもつ若手研究者に報告してもらい、関連する研究者のネットワークを構築する。それに加えて、所内班員の報告を増やし、人文科学研究所のほかの研究班とも有機的に連携しながら共同研究を進める可能性を探る。そのほか、理系研究者の報告、もしくは実験室訪問、実際にモノに触れるワークショップなど、通常の研究会とは異なる形式の例会も検討している。

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

本研究班は、令和 8 年度以降に継続の研究班に引き継ぐ予定である。そこではより具体的な研究成果の公表を目指す。令和 7 年度までの本研究班の研究成果は、令和 8 年度の人文研アカデミーで公表する予定である。